

朝鮮語の形態論的単位について

神田外語大学

菅野裕臣

朝鮮語の形態論の単位としての形態素は多くの問題をはらんでいる。例えば朝鮮語において助詞か語尾かについて議論のあったところであり、また多くの言語学者が一般に「単語」は厳密には規定し得ないものとしている。

しかしながら言語学に限らないが、一般に概念の境界は連続的であり、すべてそこには曖昧さが付きまとうことも事実である。われわれは連続性において切り取りづらい境界を、端数を切り捨てるのではなしに、むしろそれらを考慮することによって、考察するべきだろう。

ここでは形態素の問題を包括的に扱ってみようと思う。

1. 朝鮮語においても日本語においても文において比較的明瞭に取り出しやすい単位は「文節」(韓国の「語節」に対応する)であろう。これは普通一息に発音し得る単位と説明するが、さりとて音声学上の呼気段落に厳密に対応するわけではない。日本語のうちアクセントのある方言や朝鮮語のうちやはりアクセントのある方言ではアクセントの観点からは数文節が一つの単位をなすこともある。しかしそれでも文節は最小の呼気段落、最小のアクセント単位をなすことも間違いない。

よく日本語では文節を取り出す方法として終助詞「ね」、「さ」、「よ」等を付け得る場所を境界とし、同じく朝鮮語でも-요, 挿入語말입니다, 말이에요, 말이오, 말이네, 말이야, 말이지<... ですね / だね>等を挿入し得る場所を境界とすることが考えられるが、例えば朝鮮語では用言連体形の後にはそれらを付けづらいことを考えると、それも絶対的な方法とは考えられない。

さらに日本語においても朝鮮語においても文節の境界自体が曖昧なことは後に示すが、それにもかかわらず文節を取り出すことは単語の場合よりは容易である。

2. 文節内部では「切れる」部分と「切れない」部分との違いが一応区別され得る。例えば日本語「本=より=も」、「本=だ」「書く=より=は」、「書い-た=より=は」、「書い-た=らし-く」、「書き-ながら=も」において=の前後は「切れる」部分であり、-の前後は「切れない」部分と言える。「切れる」部分は Bloomfield の free form にほぼあたり、「切れない」部分とは bound form にほぼあたると考えてよい。

日本のいわゆる国文法では文節の頭以外に立つもの(これを「自立語」と呼んだ)以外を「付属語」と呼び、後者のうち「より」、「も」、「は」、「なが

ら」の類、すなわち不変化のものを「助詞」と、「た」、「だ」、「らし-く」のような変化するものを「助動詞」と呼んだ。この際それ自体単独で発音し得る（すなわち「切れる」）「本」、「書く」、「より」、「も」、「は」、「だ」、「らし-く」とは異なり、「書い-」、「-た」、「-ながら」のようにそれ自体独立して用いられない（すなわち「切れない」）点は全く無視された（もっとも「寒-い=ながら=も」では「ながら」は自立的である）。わたくしは = の前後の単位のうち文節の頭に立ち得るものを「自立語」と呼び（「本」；「書く」、「書い-た」、「書き-ながら」）、自立語の後ろに来るものを「付属語」と呼ぼう（「より」、「も」、「は」、「だ」、「らし-く」）と思う。「自立語」も「付属語」もそれぞれ「不変化語」と「変化語」に区分される（自立語「本」、付属語「より」、「も」、「は」は「不変化語」、自立語「書く」[「書く」、「書い-た」、「書き-ながら」の代表形]、付属語「だ」、「らし-い」[「らし-く」の代表形]は「変化語」)。「自立語」と「付属語」は自立性の有無による「単語」の区分である。つまり-は一つの単語内部の部分の境界ということになる。もっとも相対的に明瞭に見える = と - の別も実際は不分明な場合のあることは「書き-ながら=も」と「寒-い=ながら=も」で見た。

わたくしは「付属語」のうち不変化語を「助詞」と呼び、変化語を「助動詞」と呼ぼうと思う。わたくしの言う「助動詞」は現代日本語では「だ」、「です」、「らしい」しかなさそうである。また「書い-た」、「書き-ながら」のように-の右に表記される形を「語尾」と呼ぶことにしよう。「語尾」のうちには「-た」のように「変化する」ものと、「-ながら」のように「変化しない」ものが含まれる。前者をいわゆる国文法では「助動詞」と、後者を「助詞」と呼んだ。すなわち国文法の「助詞」はわたくしの「助詞」と「語尾」に、「助動詞」はわたくしの「助動詞」と「語尾」に対応することになる。

「自立語」にも「変化する」ものと「変化しない」ものとがあるが、前者には「書く」[動詞]、「寒い」[形容詞]の類が、後者には「本」[名詞]の類が属する。「変化語」は自立語であれ付属語であれ「語幹+語尾」からなる（「語幹」しかない場合もある）。「書く」～「書き-」～「書い-」、「寒-」；「らし-」は「語幹」である。従って「語幹」はそれ自体で独立して用いられるもの（「書く」）と語尾を伴ってのみ用いられるもの（「書き-」～「書い-」、「寒-」；「らし-」）がある。前者、すなわち「書く」の類は不変化語の「本」（自立語）や助詞（付属語）にも見出せる。

いわゆる国文法の不当性の第一として、動詞「書く」の「活用形」のうち自立的なもの（「切れる」もの）、すなわち「書く」（終止形、連体形）、「書き」（連用形）、「書け」（命令形）以外の非自立的なもの（「切れない」もの）、すなわち「書か-」（未然形）、「書き-」（連用形）、「書い-」（連用形）、「書け-」（仮定形）、「書こ-」（未然形）等をそれぞれ単独で動詞と認定したこと、不当性の第二として、これまた非自立的ないわゆる「助詞」、「助動詞」

を単語と認定したこと、すなわち「単語」の認定のしかたを誤ったことが挙げられる。

以上のうち「単語」を図示すればおおよそ次の如くである。

自立語 変化語 動詞, 形容詞 [語幹, 語幹+語尾]

〃 不変化語 名詞 その他 [語幹]

附属語 変化語 助動詞 [語幹, 語幹+語尾]

〃 不変化語 助詞 [語幹]

「語幹」や「語尾」を「形態素」と呼ぼう。つまり「形態素」は「単語」の下位単位である。「語幹」や「語尾」は「形態素」の種類である。なお朝鮮語では母音+·가 / 子音+

-이<... が>のように異なった形を持つが、意味がまったく同じという形態素があるは、異なった形をそれぞれ「異形態」と呼ぶ。形態素と異形態との関係は音素と異音の関係と似ている。

動詞や形容詞の「語幹」はいわゆる「活用形」の形を取って現れる。「活用形」は、上に見たように、自立的なものと非自立的なものがあるが、これが日本語において重要な形態論的単位であることも事実である。日本のローマ字論者その他の人々が「単語」の認定に一定の役割を果たしたにもかかわらず、例えば・anai, ・imasu等を語尾と認定したことは誤りであった。むしろこの「活用形」をギリシャ文法になぞらえて「語基」と認定し直した河野六郎博士の功績を大とする。その際「未然形」、「連用形」、「終止形」、「連体形」、「假定形」、「命令形」等の名称は自立的な「連用形」、「終止形」、「連体形」、「命令形」以外は不当である。「未然形」、「假定形」は単独でそのような機能を持つことはなく、「未然形」のうち「書こ」+「う」は「勧誘形」とでも名づけたらよい（現代日本語に「う」などという形態素が存在しないことは明らかである）。非自立的な「連用形」をそう呼ばなければならない理由もない。われわれは結局のところこれらの形を機能とは結び付けないで、第I語基、第II語基、第III語基のように呼ぶ方がよいのである。日本語にいったいくつの「語基」があるのかは難しい問題である。いわゆる五段活用動詞においては最大限6つ（「書か」、「書き」、「書い」、「書く」、「書け」、「書こう」）、二段活用動詞では5つ（「見」、「見る」、「見れ」、「見ろ」、「見よう」；「出」、「出る」、「出れ」、「出ろ」、「出よう」）、それらを総合すれば7つを立てざるを得ず、さらにいわゆるサ行変格用言（「する」）の「未然形」に「さ」と「し」の2つがあることを考慮すれば8つとなる。形容詞は5つは区別する必要があるそうだが（「よかろう」、「よかつ」、「よく」、「よい」、「よけれ」）、助動詞「だ」を考慮するならば（「だろう」、「だっ」、「で」、「に」（副詞形）、「だ」、「な」（連体形）、「なら」）、7つあることになるが、「副詞形」と「連体形」とは「だ」にのみ存在する特殊なものとなるから、もしも日本語のすべての用言を考慮に入れるならば語基が10個あることに

なる。[この部分については菅野裕臣,「朝鮮語の語基について」,『日本語と外国語との対照研究 IV 日本語と朝鮮語』,国立国語研究所,1997,1-21 ページ参照;『韓国言語文化研究』,福岡:九州大学,第10号,2005,1-25 ページ採録]。

「語幹」は「語根」及び「語基を作る要素」からなる。「語根」は例えば √kak- (「書く」), √mi- (「見る」), √de- (「出る」), √yo- (「よい」) 等だが,名詞等(「本」,「静か」その他)では語幹=語根と考えることが出来る。

形態論的単位としては「語幹」を構成する「語根」及び「語基を作る要素」のほかに「接辞」がある。「接辞」には「接頭辞」と「接尾辞」とがある。「接尾辞」には「変化するもの」(「-らし-い」[名詞+],「-がる」[形容詞語幹+]等)と「変化しないもの」(「-さ」[形容詞語幹+,形容名詞+],「-そう」[動詞連用形+,形容詞語幹+,形容名詞+]等)がある。実は動詞や形容詞に接尾する「語尾」のうち「変化するもの」(「-ない」,「-れる/-られる」,「-せる/-させる」,「-たい」,「-たがる」,「-た」等)を「接尾辞」と呼ぶことも可能である。すると「接尾辞」には文法論,すなわち形態論に属するものと語彙論に属するものがあることになる。いわゆる「屈折接尾辞」と「派生接尾辞」がそれである。しかしながら語彙と文法の境界が曖昧なこととあいまって文法的接尾辞と語彙的接尾辞との境界も不分明であり,日本語文法においても「-たい」を文法に入れながら「-たがる」に言及しない人が多く,しかもいわゆる「受身」と「使役」,すなわちヴォイス接尾辞等が語彙的接尾辞の前に来ることがあり得ることは問題にされていないようである(「読ま-せ-られ-た-がり-屋」,「読ま-せ-られ-た-がり-そう」)。「接頭辞」にも文法的なものがある(「お-読み」,「お-高-い」等)。

「動詞」,「形容詞」,「名詞」その他;「助詞」,「助動詞」等は「単語」の種類,すなわち「品詞」である。「自立語」/「付属語」,「変化語」/「不変化語」も「単語」の別の観点からの分類である。

「形態素」,「単語」,「品詞」等々は「文法」の一分野たる「形態論」の単位である。「形態論的単位」はこれ以外にまだある。「文節」は「文法」のもう一つの分野たる「統辞論」の単位である。

「単語」は「文法論」,「語彙論」双方の最小の単位である。普通「形態素」を言語の最小の単位とする人が多い。しかし「文法的形態素」(「語幹」,「語尾」,「文法的接尾辞」等)はさておき「語彙的形態素」(「語彙的接頭辞」,「語彙的接尾辞」その他)はいわば「単語形成論」あるいは「造語論」の最小の単位である。言語それ自体の最小の単位はあくまでも「単語」である。

3. 朝鮮語でも例えば次の例では「自立語」/「付属語」,「変化語」/「不変化語」,「品詞」等について似たことが言えそうに見える。“책=보다=는” <

本よりは>，“책=이-다”<本だ>，“쓰-기=보다=는”<書くよりは>，“써-쓰-기=보다=는”<書いたよりは>，“쓰-면서=도”<書きながらも>。しかし正書法上の形の同一性(すなわち表記の形態音素論的性格)[例えば“쓰기”<書くこと>の“-기”は /기/, “썼기”<書いたこと>の“-기”は /기/; “쓰기보다”<書くより>の“-보다”は /보다/, “책보다”<本より>の“-보다”は /보다/; “쓰면서도”<書きながらも>の“-도”は /도/, “책도”<本も>の“-도”は /도/; “썼기”<書いたこと>の“-쓰-”は /쓰/, “썼는데”<書いたのに>の“-쓰-”は /쓰/]にもかかわらず，次の対比を見るに及んで日本語ほど単純ではないことが分かる。“책은” /채근/ <本は>，“책이다” /채기다/ <本だ>; “앞은” /압픈/ ~ /아픈/ <前を>，“앞이다” /압피다/ ~ /아피다/ <前だ>。

母音に接尾する“-는”<は>が，日本語の助詞に似て，その前の形態素との間に明瞭な音的境界を置き得ることは明らかである。さらに“책은” /채근/ <本は>，“책이다” /채기다/ <本だ>は一見“-은”とその前の形態素との境界が“-는”の場合よりも強いように見えるが，“책 위” /채귀/ <本の上> (“위”<上>は自立語)の場合と同じく朝鮮語の enchainement という音的性格から形態素末の子音と次の形態素の頭音とが続いているに過ぎず(ただし enchainement は“책은” /채근/ <本は>では絶対的，책 위” /채귀/ <本の上>ではそうではないという違いはある)，この場合の“-은”はその前の形態素との間の結合の強さ(硬さ)に関して基本的に“-는”と同じである(なお enchainement とは例えばフランス語 il aime [ilɑ̃m] <彼は愛する>のような場合であって，ils aiment [ilzɑ̃m] <彼らが愛する>の場合のような liaison とは異なる)。しかし“앞은” /압픈/ ~ /아픈/ <前を>，“앞이다” /압피다/ ~ /아피다/ <前だ>となると，名詞“앞” /압/ <前>は，母音で始まる非自立的形態素“-은”，“-이다”の前で非自立的な変種(いわゆる「異形態」) /압ㅁ/ ~ /아ㅁ/ が現れることにより，あたかも動詞における「語幹」のような機能を持つことになり，この場合“-은”，“-이다”は動詞における「語尾」あるいは「接尾辞」のような機能を持つ。

朝鮮語の動詞と形容詞，すなわち「用言」は日本語同様「語基」を持ち，それは第 I 語基 [Ø]，第 II 語基 [- · - / - - -]，第 III 語基 [- ㅏ - / - ㅑ -] の 3 種類を区別するが(これは河野六郎博士による)，中期朝鮮語にはさらに第 IV 語基 [- ㅓ - / - ㅕ -] (後に第 II 語基に合流した)があった(現代語: I 먹 -, II 먹으 -, III 먹어 -; 中期語: I 먹 -, II 머구 -, III 머거 -, IV 머구 - <食べる>)。河野六郎博士はある時第 V 語基 [- ㅣ -] なるものを認めたことがあったが，これは形容詞の副詞形であり，これを文法に含めてよいかどうか問題となる。いずれにせよ第 III 語基と第 V 語基だけが自立的に用い得る。前者をししば「連用形」と呼ぶ所以である。

この語基は現代朝鮮語では用言にのみ認められるが，中期朝鮮語において

は「体言」にも認められた。用言の語基を考慮するならば、さしずめ次のように認め得るだろう。I 글, II 그르-, III 그러-, V 그리<文字>。用言との違いは第IV語基にあたるものがないこと、第I語基が自立的である点である。II 그르-, III 그러-は例えば그르<文字は>, 그를<文字を>, 그레<文字に>のように現れる。中期語においては-는<-は>や-를<-を>でさえ-ㄴ+은, -ㄴ+을, すなわちそれぞれII-ㄴ, II-은のダブった形あるいは延長形なのであって、体言に接尾する非自立的形態素のすべては用言語幹に接尾する語尾と同じ機能を持っていたのである。現代語でも特にソウル方言では닭 /닥/<鶏>, 닭은 /다근/<鶏は>; 부엌 /부억/<台所>, 부엌은 /부어근/<台所は>; 낮 /날/<昼>, 낮은 /나슨/<昼は>; 꽃 /꼇/<花>, 꽃은 /꼬슨/<花は>; 밭 /밭/<畑>, 밭은 /바슨/<畑は>; 무릎 /무릅/<ひざ>, 무릎은 /무르븐/<ひざは>; 여덟 /여덜/<八>, 여덟은 /여더른/<八は>のように、実質的に終声として/ㄹ/, /ㄴ/, /ㅇ/のほかには多く/ㄱ/, /ㄷ/~/ㅌ/, /ㅂ/, /ㅃ/しか現れないという特徴があり、この点で体言においては「語尾」の「助詞」化が進行中だと言い得るが、日本語の「助詞」ほどの段階にはまだ到っていないと言い得る。なお/ㄷ/~/ㅌ/は外国語の引用においてさえ徹底して現れる。good /굳/<good>, good 은 /구슨/<goodは>。朝鮮語のこのような形態素を「助詞」と名づける学者と「語尾」と認める学者がいるのはこの形態素の自立性の曖昧さによるのである。

このように現代朝鮮語の「助詞」(不変化語)は条件付きでそう名づけなければならないが、いわば日本語の「助動詞」(変化語)にあたるものは繫辞-이-다<...である>一つだけである。朝鮮語では繫辞の否定形아니-다<...でない>は、従属語の肯定形-이-다とは異なり、自立語である。

日本語のいわゆる五段動詞、二段動詞等が動詞の活用のパターンによる動詞の分類なら、朝鮮語におけるそれは子音語幹用言, ㄷ語幹用言, 母音語幹用言その他である(この名づけも河野六郎博士である)。現代語ではㄷ語幹用言は母音語幹用言とよく似ていて第I語基と第II語基は同形である。実は現代語でも助詞-로(具格)は第II語基の体言に接尾すると言い得る。종이-로<紙で>, 연필-로<鉛筆で>, 펜으-로<ペンで>。

4. 1. 「自立語」の中には常に修飾語の後ろにのみ付くものとそのような制限のないものとある。名詞の場合前者を「不完全名詞」、後者を「完全名詞」と呼ぼう。前者は日本では「形式名詞」と言い、韓国では多く「依存名詞」と言う。わたくしが「不完全名詞」と呼ぶのに従う理由は、「形式名詞」、「依存名詞」とは異なり、それがその対立概念たる「完全名詞」を名づけているからである。

「完全名詞」も「不完全名詞」もほとんどの格助詞に従えるものと限られた格助詞しか従え得ないもの、すなわち格助詞に関して「欠如的」なもののが

ある。

「欠如的な完全名詞」は欠如性に多くの段階がある。普通「名詞」は裸の形(何の助詞も接尾しないもの), 格の形(格助詞が接尾するもの), 述語形(朝鮮語の場合は繫辞, 主格助詞+아니-다, 主格助詞+되다가接尾するもの; 日本語の場合は助動詞「だ」, 「です」, 「らし-い」が接尾するもの)がある。日本語の国文法で普通「形容動詞」と呼ばれているものはいわば述語形しか持たない欠如名詞のことである。これをわたくしは梅田博之氏に倣って「形容名詞」と呼ぶ。国文法の不当性は「本-だ」を「名詞+助動詞」のように2単語と認めながら「静か-だ」を形容動詞として1単語と認めたことにある。またしても単語の誤認である。欠如性の観点から名詞のさまざまな分類が可能だが, それは多かれ少なかれ名詞における他の品詞の性格の反映の場合もある。普通の名詞が「対象」を指すものだとしたら, 「形容名詞」は「性質」を指すだろうし(従って「性質」は「形容詞」と「形容名詞」に属すると言い得る), 「絶世」, 「未曾有」等の名詞は格助詞「の」しか従え得ないから, 「連体名詞」とでも名づけ得ようか, その他さまざまな名詞がある。朝鮮語の漢字語接尾辞一적<-的>を持つ名詞のほぼすべては「形容名詞」と言い得るが, これは述語形のほかに裸の形(連体修飾語)と具格助詞のみを従える形(副詞的)を持つ(적극적<積極的>, 적극적-으로<積極的-に>, 적극적-이-다<積極的-だ>). ここには마찬가지<同じ>も属する。これらは述語名詞とでも呼ぶべき部類の一部である(마련: I-기 / I-게 마련-이-다<... することになっている>). 他に次のようなものがある。連体名詞: 절세-의<絶世-の>, 미증우-의<未曾有-の>; 副詞的名詞: 아침저녁-으로<朝夕>.

「完全名詞」は多くの場合多かれ少なかれ「欠如的」でないものはないと言ってよい。「有情名詞」(与格-에게 / -한테, 奪格-에게서 / -한테서を従え得る): 사람<人>, 소<牛>; 「無情名詞」(与格-에, 奪格-에서を従え得る): 책<本>。「有情名詞」のうち「人間名詞」(与格-더러, -께, 主格-께서を従え得る): 사람<人>; 「非人間名詞」(そうでないもの): 소<牛>を, さらに「人間名詞」のうち「尊敬名詞」(与格-께, 主格-께서を従え得る): 사모님<奥様>; 「非尊敬名詞」(与格-더러を従え得る): 사람<人>を取り出し得る。この他「主語名詞」(主格しか従えない. 가망<望み, 見込み> [後ろに있-다<ある>, 없-다<ない>を従える]), 「場所名詞」, 「時間名詞」, 「団体名詞」, 「動作名詞」等いろいろある。これらは「格」その他の文法範疇の観点からなされた語彙の分類で, 「語彙クラス」と呼ばれる。

「完全名詞」の「語彙クラス」はそれが接尾し得る文法的な形によっても取り出され得る。「接尾辞的名詞」(名詞の裸の形+): 여부/여하<... 如何>, 선생님<... 先生>; 「位置名詞」(用言連体形+, 属格-의+): 앞

<前> ; 「規定名詞」(用言連体形+) : 지경<状況, 有様> (この単語はほとんど「述語名詞」でもある). 後者は具体的な連体形の違いにより次のものを区別し得る. 「未実現名詞」(II - ㄷに接尾する) : 가능성<可能性> ; 「実現名詞」(II - ㄹに接尾する) : 결과<結果> ; 「継続名詞」(I - ㄴに接尾する) : 경우<場合>.

「不完全名詞」は欠如性の弱いものから強いものまでさまざまである. 「非人間名詞」: 짓<こと, もの> ; 「人間名詞」: 분<かた> ; 「助数詞」(朝鮮の術語「名数詞」に対応する. 数詞+) : 켜레<... 足>, 벌<... そろえ>等を欠如性のもっとも弱いものとするならば, それの強いものとして次のものを挙げることが出来る. 「述語名詞」: 때문<ため [理由]> (I - 기体言形+, 「接尾辞的名詞」に似る) ; 「主語名詞」: 나위<はず> ; 「副詞的名詞」: 김<ついで> (「継続名詞」でもある. +与格 - 에), 때문<ため [理由]> (+与格 - 에).

一般に「規定名詞」でもある「述語名詞」と「副詞的名詞」は「完全名詞」であっても「不完全名詞」に非常に近い. 길<道> : I - ㄴ 길 - 이 - 다<... する途中だ>, I - ㄴ 길 - 에<... する途中で>, 바람<風> : I - ㄴ 바람 - 에<... するはずみで>. 바람の場合は「述語名詞」, 「副詞的名詞」としてのそれと普通のそれとが同音異義語か多義語かの問題が生じ得る. [この部分については菅野裕臣, 「朝鮮語語彙のクラスをめぐって」, 『朝鮮文化研究』, 東京: 東京大学, 第2号, 1995, 1-20 ページ参照].

現在の正書法で밖에 없다<... しかない>の밖에 (「位置名詞」の与格, 「副詞的名詞」) を分かち書きしないのは, それをすでに副助詞化したものと認定したからであろう. I - ㄴ / II - ㄷ 바 - 에 - 야<... するからには> (바<ところ> : 「不完全名詞」, 「規定名詞」, 「副詞的名詞」) では続け書きされることが多い. II - ㄷ 짓 - 이 - 다<... するだろう> (짓<こと> : 「不完全名詞」, 「規定名詞」, 「述語名詞」) では続け書きされることが多く, この形から派生した意思形 II - ㄷ 께<... するよ> (会話ではしばしば II - 께となる) はすでに完全に「語尾」である. 中期朝鮮語ではしばしば「連体形+不完全名詞+繫辞」という構造が「語尾」に転化したと思われる.

現代日本語の「連体形+不完全名詞+繫辞」, 例えば「ものだ」, 「はずだ」の類を寺村秀男氏は「助動詞」と呼んだが, これは2文節にまたがるものだから, この認定は行き過ぎと思われる. ただし国文法の「助動詞」のうち「ようだ」(連体形), 「そうだ」(終止形+), 「べきだ」(終止形+)等は果たして現代語で連体形や終止形とともに1文節をなすのかは疑わしい. わたくしはむしろこれら(「よう」, 「そう」, 「べき」)を不完全名詞と見なしたい.

いずれにせよ2文節の構造をなす「欠如的不完全名詞」は1文節をなす「語尾」とは紙一重である.

4. 2. 「自立語」の用言のうち常にある種の形にしか接尾しないものがある

り、これを仮に「補助用言」と名づけよう。この名称はそうでないもの名づけを許さないから望ましくはないが。「補助用言」には「補助動詞」、「補助形容詞」、「補助存在詞」がある。朝鮮語では純粹の「補助形容詞」として싶-다 (I-고+<...したい>, I-는가/I-는 상+<...するようだ>), 보-다 (I-는가/I-나/II-을까+<...するようだ>), 듯-하-다/듯-싶-다 (連体形+) <...するようだ>, 만-하-다 (II-ㄹ+)<...する価値がある>, 뻔-하-다 (II-ㄹ+)<(うっかり)...するところだ>, 법-하다 (連体形+) <...するようだ>等がある。否定繫辭아니-다 <...でない> (主格+) も「補助形容詞」に似て、「補助的な単語」である。

形容詞보-다는動詞보-다<見る>と同形だが、<見える>という意味のようである。このように動詞と形容詞とで同形の補助用言として次のものがある。하-다 (I-지+) 動<...する>, 形<...である>; 않-다 (I-지+) 動<...しない>, 形<...でない>; 못-하-다 (I-지+) 動<...出来ない>, 形<(ある状態に)達していない>。

「補助動詞」として말-다 (I-지+) <...するのを止める>がある。もともと状況に応じて않-다, 못-하-다, 말-다는本来の用言のように現れることがある。例えば공부 않-다 (=공부-하-지 않-다) <勉強しない>, 공부 못-하-다 (=공부-하-지 못-하-다) <勉強できない>, 공부 말-다 (=공부-하-지 말-다) <勉強するのを止める>。

「補助動詞」の多くは本来の動詞からの派生である。있다<ある, いる>—있다 (I-고+) <...しつつある(動作の継続)>, (III+) <...して(しまつて)いる(動作の結果の継続)>; 보다<見る>—보다 (III+) <...してみる(試行)>; 버리다<捨てる>—버리다 (III+) <...してしまう(動作の遂行)>; 오다<来る>—오다 (III+) <...してくる(動作の継続)>等。上記のうち있다는「補助存在詞」と呼ぶべきものである。しかしこの場合でも「補助動詞」と合成語内部の構成要素との違いが曖昧である。만나-보다<会う>, 잊어-버리다<忘れる>, 올라-오다<上がる>等参照。このようないわゆる合成語もまた、厳密に言えば、果たして1文節なのか2文節なのか分明ではない。この曖昧さがしばしば朝鮮語の分かち書きの混乱を引き起こすのである。

日本語の話し言葉ではこの類の補助動詞の一部は「語尾」化した。「書いて-いる」>「書いて-てる」, 「書いて-しまう」>「書いて-ちまう / 書いて-ちゃう」。朝鮮語のI-고 싶-다 >I-고프-다<...したい>参照。

4. 3. 「不完全名詞」も「補助用言」も「補助的な単語」あるいは「補助語」と呼ぶことが出来る。「補助的な単語」は実はこれに尽きず、連体的なものと同副詞的なものがあるが、大部分は動詞の連体形あるいは接続形であり、これらを「後置詞」として特別の品詞を立てる必要はなさそうである。대한(-

에+) < (...に) ついての, 対する>, 대하여 / 대해서 (-에+) < (...に) ついて, 対して>; 고사하고 (-는/-은+) < (...は) おろか>; 같이 < (-와 / -과+) (...と) 同じく, いっしょに, (裸の形+) (...の) ように>; 치고 (裸の形+) < (...と) して>; 가지고 (-를/-을+) < (...を) もってして>; 있어서 (-에+) < (...に) おいて>, 있어서 - 의 (-에+) < (...に) おける>; 해서 (-로 / -으로+) < (...を) 経由して> 等.

5. 例えば한국말 - 을 공부 - 한다<朝鮮語を勉強する>は한국말 - 을 공부 - 는 하 - 지만<朝鮮語を勉強はするが>, 한국말 - 을 공부 - 도 하 - 지만<朝鮮語を勉強もするが>, 한국말 - 을 공부 - 만 하 - 면<朝鮮語を勉強さえすれば>のように拡大することが出来る. 공부 - 하 - 다<勉強 - する>は「名詞+接尾辞 - 하 - 다」という構造を持つ合成語(他動詞)であるが, 名詞と接尾辞の間に副助詞が入り込むと, その接尾辞が名詞から分離し, それがあたかも自立語であるかのように振舞うのである. このように分離し得る接尾辞を含む用言を「分離用言」と呼ぼうと思う. これは「分離動詞」, 「分離形容詞」, 「分離存在詞」がある. またそのような接尾辞を「擬似接尾辞」と呼ぼうと思う.

日本語では「理解 - する」, 「理解 - させる」, 「理解 - される」; 「お読み - する」, 「お読み - いたす」, 「お読み - 申し上げる」等が「分離用言」であると思われる. なお日本語でも朝鮮語でも「分離用言」は1単語であるがために1文節であるとされているようだが, はたして本当に1文節をなすかは疑わしく, もしも「名詞+動詞」という2文節の構造であるとするならば, これは「分離用言」というものではなく, 初めから「2文節からなる1単語」とすればよいのである. トルコ語 teşekkür etmek<感謝する>参照. なお国文法では例えば「お読みになる」を「読む」という動詞の尊敬形とするようだが, 「お - 読み - に - なる」, 「お - 読み - に - は - なる」, 「お - 読み - に - も - なる」等のようになるから, これらは明らかに初めから2文節からなる構造である.

朝鮮語の「分離用言」には次のようなものがある. 「分離動詞」と「分離存在詞」の場合は内部に副助詞だけでなく格助詞(主格あるいは対格)も挿入され得る.

1) 分離動詞

i. 名詞的要素+擬似接尾辞

a) 名詞的要素+擬似接尾辞 - 되 - 다<...される> [主格助詞も挿入され得る]

b) 名詞的要素+擬似接尾辞 - 하 - 다<...する>, - 받 - 다<...される>, - 당 - 하 - 다<...される>, - 시키 - 다<...させる>, - 드리 -

다<...さしあげる> [対格助詞も挿入され得る]

ii. 名詞+動詞, 存在詞

a) 名詞 (+主格助詞) +動詞, 存在詞 화(가)나 - 다<腹 が 立 つ >, 재미(가)있 - 다 <面白い>

b) 名詞 (+対格助詞) +動詞 화(를)내다<腹を立てる>

iii. 第 III 語基+擬似接尾辞, 動詞

a) 形容詞の第 III 語基+擬似接尾辞 - 하 - 다, III - 다+動詞보다 좋아 - 하 - 다<好む>, 쳐다 - 보 - 다<見上げる>

b) 用言の第 III 語基+擬似接尾辞 - 지 - 다 좋아 - 지 - 다<よくなる >, 갈라 - 지 - 다<分かれる>

2) 分離形容詞 이상 - 하 - 다<おかしい>, 고생 - 슥 - 다<苦勞だ>

iii.b)及び2)は現在若い世代では用いられなくなりつつある. なおomanung - 들 하 - 십니까?<(多数の人に向かって)皆さん, ごきげんよう>参照. [この部分については菅野裕臣他共編,『コスモス朝和辞典』,白水社,1988,1033-1034 ページ参照].

分離用言は補助用言にも存在する. 「補助分離形容詞」: 만 - 하 - 다<...する価値がある>; 갈 만 - 도 못 - 하 - 다<行く価値もない>; 「補助的
分離動詞」: 척(을)하다 (連体形+) < (...する) ふりをする>.

6. 「語尾」, 「助詞」, 「助動詞」はまず形態論的, 統辞論的特徴により分類される.

朝鮮語の用言の語尾はその用いられる統辞論的位置により「終止形」(文末に用いられる), 「連体形」(体言の前に用いられる), 「接統形」(用言を修飾する), 「体言形」(格助詞を従え得る)に分類される.

用言の語幹には次の「文法的接尾辞」が接尾し得る. 「ヴォイス接尾辞」(- 이 -, - 히 -, - 리 -, - 기 - 他), 「謙讓接尾辞」(I - 삼 - /I - 잡 -), 「尊敬接尾辞」(II - 시 -), 「過去接尾辞」(III - ム -), 「蓋然性接尾辞」(I - 겐 -). 韓国の学者の多くはこれらを「先語末語尾 (prefinal ending)」と呼ぶが, それでもかまわない. 文法的な「接尾辞」と「語尾」の区別の困難な言語が存在するものである. 例えばロシア語の被動過去分詞 *влюбл-енн-ый*<愛された>は「文法的接尾辞+語尾」を持つが, 英語の *loved*<love の過去形/過去分詞形>の *-d* が現代語で「文法的接尾辞」であるか「語尾」であるかは大きな問題ではない. 朝鮮語の上記の「接尾辞」のうち「ヴォイス接尾辞」が真に文法的であるのか語彙的であるのかは議論のあるところで, 分明ではない.

上記の接尾辞の有無によりさまざまな「文法範疇」が出来る. すなわちヴォ

イス(基本/受身/使役), 謙讓/非謙讓, 尊敬/非尊敬, テンス(過去/非過去), 蓋然性/非蓋然性. これらの「文法範疇」は「終止形」にほぼ現れるが, 「連体形」には蓋然性/非蓋然性は現れず, またテンスも終止形とは異なる. 「接続形」となるとこれらの「文法範疇」は散発的に現れるのみである.

「終止形」はその語尾の体系からさまざまな「文法範疇」が出来る. 待遇法(上称/中称/等称/下称), 叙述/疑問, 法I(直説法/目撃法/推量法/命令法/勸誘法/意思法), 法II(詠嘆/婉曲/確言/確認). 法Iのうち直説法/目撃法/推量法の別は中期語におけるそれらの「法」の形態素の痕跡をよく残している. しかし現代語ではこれらの「文法範疇」の現れ方はかなり「屈折的」である(この見方は河野六郎博士のもの). ここでわれわれはいくつかの形態素の膠着的な融合が屈折を引き起こす例を見るのである. またこれら以外の「文法範疇」の現れ方はかなり「膠着的」である. 「終止形」の「文法範疇」を極として次に位置するのがヴォイス以下の上記の「文法範疇」である.

「助詞」は体言と他の単語との関係を示す「格助詞」が取り出される. 「格助詞」は「格」という文法範疇を作る. 朝鮮語に「格」がいくつあるかは数え方にもより分明ではない. 「格」を考える場合, 例えば -에서<... (場所)で, ... (場所)から>, -에게서<... (人間)から>, -로서<...として>, -에게로<... (人間)の方へ>の類を -에-서, -에게-서, -로-서, -에게-로のように最小の形態素に分解することはかつてアメリカ構造主義華やかなりし頃の韓国で流行ったが(これをわたくしは「分解主義」と呼ぼうと思う), 現代語の「格」の分析には意味がない. 「形態素」を越す単位(例えば一つの文法的意味をなすのに参加するいくつかの形態素からなる「文法素」という単位)を作る必要がある. 朝鮮語は交替可能な形が多く, 各々の「格」の意味ともあいまって, 書き言葉/話し言葉, 尊敬/非尊敬, 有情性/無情性などのさまざまな範疇を加えて「格」の体系を作る必要がある. 例: 「与格」: (書き言葉)(無情名詞+) -에 / (有情名詞) -에게, (話し言葉)(有情名詞+)(非尊敬) -한테 / (尊敬) -께 / (人間名詞+)(+言語活動動詞) -더러(これらの形態素すべてが「与格文法素」をなす). 例えば北朝鮮の文法書で -한테, -하고, -더러等の助詞を 도움토<補助的名助詞>と呼んで「格助詞」扱いしないのは不当というほかない.

「助詞」の第2は a) 「A+助詞+B」(この後ろに格助詞が来得る)あるいは b) 「A+助詞+B+助詞」という構造に入り込むもので, これを「並立助詞」と呼ぶ. いわばヨーロッパ語の等位接続詞にあたるものである. -과 / -와 (a, b)<...と>; -나 / -이나 (a)<...か/や>, (b)<...も, でも>; -도 (b)<...も>; -에 / -에다가 (a)<...に>等. ただはまだこれらの認定にはいろいろと問題がありそうである.

「助詞」の第3は「格助詞」に接尾してそれに別の意味を付加するための「副助詞」である。韓国ではこれを多く「特殊助詞」と呼ぶ。もっとも韓国では「特殊助詞」に不完全名詞その他の形態素を含める人がいる。학교에 갔다. <学校に行った。> 학교에는 갔다. <学校には行った。> 학교에도 갔다. <学校にも行った。>ただし主格助詞と対格助詞は「副助詞」の前で省略される。この点は日本語も同じである。비가 왔다. <雨が降った。> 비는 왔다. <雨は降った。> 비도 왔다. <雨も降った。>; 책을 읽었다. <本を読んだ。> 책을 읽었다. <本は読んだ。> 책도 읽었다. <本も読んだ。>

「副助詞」がこれ以外の形態素にも接尾することは上記の5.の「分離用言」の項を参照されたい。さらに「副助詞」は用言の多くの「接続形」にも接尾する。이성적이고 인정미 있는 사람 <理性的で人情味ある人>, 이성적이고도 인정미 있는 사람 <理性的かつ人情味ある人>. しかし「接続形+副助詞」であるためにはあくまでも「接続形」に「副助詞」の意味が付け加わったものであるべきだから、実際にそれを「副助詞」と認められるかどうかは難しい問題である。例えば그 학생은 가난해서 일하면서 공부했다. <その学生は貧しくて働きながら勉強した。>그 학생은 가난해서 일하면서도 공부했다. <その学生は貧しくて働きながらも勉強した。>この場合일하면서<働きながら>は「同時」を意味し, 일하면서도<働きながらも>は「働いたにもかかわらず」を意味するから, 後者は, 勿論歴史的には前者と密接な関係があると思われるが, 前者に「副助詞」の意味を付加したとは思われず, II-면서도はII-면서とは区別される別の「接続形」と認められる可能性がある。

一つの形が「格助詞」, 「副助詞」, 「並立助詞」のいずれかにまたがるものがある。例えば-도<...も> (「副助詞」, 「並立助詞」), -까지<...まで> (「格助詞」, 「副助詞」), -와/-과 (「格助詞」, 「並立助詞」)等。「格助詞」, 「副助詞」, 「並立助詞」相互の結合の状況がかなり複雑である(例えば副助詞+副助詞「-조차-도<...さえ-も>」)。「副助詞」の一部は「格助詞」の前にも来られるが(-만-이<...-だけ-が>, -들-이<...-たち-が>), -부터-가<...からして>), これらは「副助詞」なのか,あるいは「接尾辞」とでも見るべきものなのか?

7. 日本語において動詞の否定形「書か-な-い」は1単語の内部での活用だが, 形容詞「よ-い」の否定形「よ-く な-い」は2文節にまたがり, この場合の「な-い」が, 動詞の否定形の「-な-い」(語尾あるいは文法的接尾辞)とは異なり, 「補助形容詞」であることは明らかである。つまり日本語の動詞では肯定/否定の範疇は1単語内部のものだが, 形容詞の肯定/否定のそれは1文節と2文節にまたがることになる(名詞の述語形「本-だ」/「本-で な-い」, 形容名詞の述語形「静か-だ」/「静か-で な-い」)

もこの点同じである)。

朝鮮語には日本語の形容詞のようなもの(1文節と2文節とにまたがる範疇)が極めて多い。「肯定/否定」: 간다<行く>(肯定)/가지 않는다<行かない>(否定)/가지 못한다<行けない>(不可能);「アスペクト」: 간다<行く>(動作の不継続)/가고 있다<行きつつある>(動作の継続)/가 있다<行っている>(動作の結果の継続)。凡そ2文節以上からなる構造(完全な自立語+補助的な単語),例えば次のような構造はすべてそれぞれ간다<行く>と対立をなし,そのためまだ研究が着手されていない数多くの範疇があるものと思われる。가 주다<行ってあげる/くれる>/가 드리다<行ってさしあげる>, 가 보다<行ってみる>, 가 놓다<行っておく, 行っている>, 가 버리다<行ってしまう>, 가고 싶다<行きたい>, 가도 된다<行ってもよい>, 가서는 안 된다<行ってはならない>, 가야 된다<行かなければならない, 行くべきだ>, 가지 않으면 안 된다<行かなければならない>, 가는 듯하다<行くようだ>, 가는 것 같다<行くようだ>, 갈 수 있다/없다<行くことができる/できない>等。

このように1単語内部の語形変化による形を「総合的な形」あるいは「総合形」と呼び, 2単語以上にまたがる形を「分析的な形」あるいは「分析形」と呼ぶ。一般に屈折語は「総合的な形」が多いと言われるが, 屈折性の極めて強いサンスクリットや古典ギリシャ語でもそれらのパラディグマ(語形変化表)を見る時は「分析的な形」が散見されるのであり, この傾向はヨーロッパ諸語でも近代語になるほど著しくなる。例えば現代語の中で屈折性の強いロシア語でもいわゆる不完了体未来 буду читать (budu chitat') <I will write>, 接続法 читал бы (chital by) <I should write>は「分析的な形」であり, 屈折性の弱い英語の場合次のような「分析的な形」を挙げることが出来る。受身: be written, 進行(アスペクト): be writing, 完了: have written, 推量: will/shall write, 可能: can write, 多回: used to write 等。これらが組み合わさると3単語, 4単語の結合まで現れる (will have been written)。この他例えば be going to write の類も同じものとして認められるだろう。不定詞 write, to write のうち前者は「総合的な形」, 後者は「分析的な形」である。研究が進んだといわれるヨーロッパ諸語には案外このような形が手付かずのまま放置されていると言ってよい。

日本語の「書く」の尊敬形「お-書き-くださる」は「総合的な形」, 「お-書き-になる」は「分析的な形」である。国文法の誤りのもう一つは「総合的な形」と「分析的な形」とを混同したことにある。

「総合的な形」と「分析的な形」は「パラディグマ」(語形変化表)の存在を前提としている。「パラディグマ」は形態論に属する。日本語と朝鮮語はいまだに研究の進んでいない数多くの「分析的な形」を含む「パラディグマ」

を持っていると言うべきである。「パラディグマ」のレベルで、例えば日本語「読む」、朝鮮語“읽 - 다”に対する尊敬形「お - 読み - になる」, “읽으 - 시 - 다”と同じ関係として、日本語「いる」、「行く」、「来る」—「いらっしやる」、朝鮮語“있 - 다” <いる>—“계시 - 다” <いらっしやる>がある。つまり日本語「いらっしやる」、朝鮮語“계시 - 다”はそれぞれ「いる」、「行く」、「来る」及び“있 - 다”という用言の「パラディグマ」に入る(いわゆる「補充法」による)。このように「補充法」によって同じ「パラディグマ」に入り得る語彙を「語彙素」とでも読んで「形態素」から区別した方がよい(6. の「文法素」参照)。この場合「いる」-「いらっしやる¹」、「行く」-「いらっしやる²」、「来る」-「いらっしやる³」、「있 - 다」-“계시 - 다”がそれぞれ「語彙素」をなす。なお「いらっしやる¹」、「いらっしやる²」、「いらっしやる³」は現代語では「同音異義語」と見るべきだろう。

なお「パラディグマ」は文法のみならず語彙にもある。日本語:「読む」—「読み出す」、「読み始める」、「読み続ける」、「読み終わる」、「読み終える」、「読み直す」、「読み誤る」、「読みすぎる」、「読み急ぐ」、「読み惜しむ」、「読みかける」、「読みきる」、「読みこなす」、「読み渡る」、「読み進む」、「読み損なう」、「読み違える」、「読み遂げる」、「読み慣れる」、「読み残す」、「読み控える」、「読みまくる」、「読み及ぶ」、「読み得る」、「読みあぐねる」、「読み飽きる」、「読みかねる」。これらは極めて生産性の高い形だけを挙げたのだが、これらを含めて解決した日本の国語辞典の例を知らない。朝鮮語はこのような複合動詞は日本語ほど豊かではないが、これまた諸辞典はこれらに対して無頓着である。

「パラディグマ」の問題と関連してもう一つ。4. 1. で述べた「欠如性」とも関連するが、「文法」と「語彙」とに「規則性」と「非規則性」が対応するかのようだが、必ずしもそうではない。命令形しかない動詞(“달라”, “다고” <くれ>)もあれば、数少ない動詞にしか接尾しない語尾(「行き - しなに」、「来 - しなに」、「帰り - しなに」)もあるし(朝鮮語の“III - ㅁ자” <...したって, ...したところ f で>はほとんど補助動詞보다 <(...して)みる>にしか接尾しない)、派生力の豊かな「語彙論的接尾辞」(日本語「-屋」、「-だらけ」、「-る」[2-3 音節語+], 朝鮮語“-질”[名詞+] <...の仕事, 稼業>、“-투성이” <...だらけ>)もある。「文法的パラディグマ」が決して生産性とは結びつかないことを知るべきである。[この部分については菅野裕臣, 「文法と語彙のはざま」, 『神田外語大学紀要』, 第12号, 2000, 247-271 ページ参照].

8. 「分析的な形」と「単語結合」(「連語」という人もいる。ロシア語: словосочетание (slovosochetanie), 英語: collocation. ドイツ語: Valenz

（「結合価」）が似ている）とは厳密に区別されなければならない。「分析的な形」が2単語以上からなるとはいえ「総合的な形」の延長線上にあり、「形態論」の中で扱われざるを得ないのに対して、「単語結合」は主として「格」支配に基づく修飾語と非修飾語との統辞論的結合に過ぎない。

例：1) 主語 - 述語的結合：「雨が - 降る」

2) 等位的結合：「{本と - 雑誌}」, 「{本と - 雑誌と}」, 「{本か - 雑誌}」

3) 従位的結合（修飾語 - 非修飾語的結合）

a) 規定語的結合：「わたくしの - 本」, 「よい - 子」, 「静かな - 環境」

b) 対象語的結合：「本を - 読む」, 「子どもに - あげる」, 「崖から - 落ちる」

c) 状況語的結合：「運動場で - 遊ぶ」, 「明日 - 来る」, 「はやく - 歩く」

以上のうち1)と2)を「単語結合」から除外する人もいる。b)とc)との区別が困難な場合もある。1)と2)はいずれも「文の成分」, すなわち「主語」, 「述語」, 「規定語」(連体修飾語), 「対象語」(補語), 「状況語」(連用修飾語)を基礎としている。2)をなす複数の項は同じ成分である。「{本と - 雑誌(と)}は」(主語), 「{本と - 雑誌}だ」(述語), 「{本と - 雑誌(と)}の」(規定語), 「{本と - 雑誌(と)}を」(対象語), 「{本と - 雑誌(と)}で」(状況語)。2)と似たものに「{本 及び 雑誌}」, 「{本 あるいは 雑誌}」のような「等位接続詞」をはさんだ2つの名詞という構造がある。ただし「本も - 雑誌も」という構造では「も」の前に格助詞が来るという点で「{本と - 雑誌(と)}」の場合とは異なる。この扱いについてはなおも問題がある。「単語結合」で用いられる「助詞」は2)の場合「並立助詞」(この際例えば「...と... (と)」は「分析的な形」と言えるだろう), 1), 3)の場合「格助詞」である。

これらを複合させることも可能である。例：「あの - 子は - 昨日 - 学校か - 家で - わたくしの - 本や - 雑誌を - 初めから - 終わりまで - かなり - 丹念に - 読んだ。」この中で「子が - 読む」は1), 「学校か - 家」, 「本や - 雑誌」は2), 「あの - 子」, 「わたくしの - 本」はa), 「本を - 読む」, 「初めから - 読む」, 「終わりまで - 読む」はb), 「昨日 - 読む」, 「学校で - 読む」, 「丹念に - 読む」, 「かなり - 丹念に」はc)であり, この文はこれらの「単語結合」の複合からなっている。

「単語結合」はあくまでも結合における文法的規則に関するものであるから「語順」とは直接関係がない。日本語は「修飾語 + 非修飾語」, 「主語 + 述語」という順序が一般的だから(上にそのような順序で挙げた), その条件のもとでいろいろと「語順」のヴァリエーションが出来る。例「昨日 - 学校か - 家で - あの - 子は - かなり - 丹念に - 初めから - 終わりまで - わたくしの - 本や - 雑誌を - 読んだ。」また「副助詞」がこの構造に入り込もうとも,

そのことは「単語結合」とは直接の関係はない。「学校か - 家では - 昨日 - あの - 子も - かなり - 丹念に - 初めから - 終わりまで - わたくしの - 本や - 雑誌を - 読んだ。」

述語は「総合的な形」のみならず「分析的な形」によりいろいろと拡大が可能であるが、しかし「単語結合」の構造自体には何の変化も生じさせない。

「本を - 読む」、「本を - 読んだ」、「本を - 読めば」、「本を - 読んだだろう」、「本を - 読むと」、「本を - 読んで いる」、「本を - 読んで やる」、「本を - 読んで みる」、「本を - 読むかも 知れない」、「本を - 読んで やって みても よい」等。一番最後のものは3つの「分析的な形」：「- て やる」、「- て みる」、「- ても よい」の複合である。このように7. に挙げた「分析的な形」の存立を保証するものはどんなに形が拡大しても「述語性」が一定であるという点である。なお述語の「分析的な形」にはその内部に「副助詞」の入り込むことを許すものがある。“책을

- 읽고 있다” <本を - 読んで いる>，“책을 - 읽고는 있다” <本を - 読んで いる>，“책을 - 읽고도 있다” <本を - 読んで みる>，“책을 - 읽고만 있다” <本を - 読んでばかり いる>。

「単語結合」は、統辞論に属するとはいえ、単語の結合性（ロシア語：сочетаемость слова (sochetaemost' slova)；ドイツ語：Valenz (結合価))を示すための辞典が必要である。ドイツやフランスではその種の辞典が出ているが、動詞中心に限られる。ロシア語や英語の本格的な辞典が刊行されている。Институт русского языка им. А. С. Пушкина, «Учебный словарь сочетаемости слов русского языка», Под редакцией П. Н. Денисова, В. В. Морковкина, Москва: Издательство «Русский язык», 1978, 685 стр. (Institut russkogo jazyka im. A. S. Pushkina, „Uchebnyj slovar' sochetaemosti slov russkogo jazyka”, Pod redakciej P. N. Denisova, V. V. Morkovkina, Moskva: Izdatel'stvo „Russkij jazyk”, 1978, 685 str. (A・S・プーシュキン記念ロシア語研究所, 『ロシア語単語結合性学習辞典』, P・N・デニソフ, V・V・モルコフキン監修, モスクワ:「ロシア語」出版社, 1978, 685 ページ); 『新編 英和活用大辞典』, 編集代表: 市川繁治郎, 東京: 研究社, 1995, 2782 ページ。日本でこの種の研究で先駆的な役割を果たしたのは奥田靖雄氏のグループである。日本語は他のグループによりこの種の簡単な辞典が出されているが、動詞中心でしかない。中国語も最近はこの種の研究がさかんである。朝鮮語のこの種の辞典としては“현대 한국어 동사구문 사전”, 지은이 대표: 홍재성, 서울: 두산동아, 1997, 489 페이지 (『現代朝鮮語動詞構文辞典』, 著者代表: 洪在星, ソウル: 杜山東亜, 1997, 489 ページ) があるが、やはり動詞中心である。

9. 上記の8. で「述語」の延長線上の「分析的な形」という表現をしたの

は、それらが「終止形」のみならず「連体形」, 「体言形」, 「接続形」でも用い得るからである。“읽고 있다” <読んでいる> (終止形), “읽고 있는” <読んでいる> (連体形), “읽고 있음” <読んでいること> (体言形), “읽고 있으면” <読んでいれば> (接続形). 6. で述べたように朝鮮語では「終止形」の「屈折的文法範疇」を除くとその他の文法範疇は「連体形」, 「体言形」, 「接続形」にもまたがるものがある. ところで「分析的な形」例えばはそのように「連体形」, 「体言形」, 「接続形」にまたがるものとそうでないものとを区別しなければならない. 後者を取りあえず次のように分ける.

A) 用言

- 1) 「終止形相当の分析的な形」: II - ㄷ 것 - 이 - 다 <...するだろう>. 複合した連体形: II - ㄷ 것 - 이 - 라 - 는 <...するだろうという>, 複合した接続形: II - ㄷ 것 - 이 - 라 - 고 <...するだろうと>, II - ㄷ 것 - 이 - 라 - 면 <...するだろうなら>等があるが, いずれも「終止形+하다省略形」でしかない. これは終止形とは紙一重である.
- 2) 「連体形相当の分析的な形」: I - 고 난 <...し(終つ)た>
- 3) 「接続形相当の分析的な形」: I - 고 나서 <...し(終つ)て>, I - 고 나면 <...したら, ...し終われば>; II - ㄷ 바 - 에 - 야 / II - ㄷ 바 - 에 - 는 <...するからには>; (用言終止形直説法叙述形下称+) 손 - 치 - 고 <...するとして>, (用言終止形直説法叙述形下称+) 손 - 치 - 더라도 <...するとして>, (用言終止形直説法叙述形下称+) 손 - 처 - 서 <...するとして>; I - 는 김 - 에 <...するついでに>; I - 는 바람 - 에 <...する拍子に>; II - ㄴ 다음 <...した後>; I - 던 / II - ㄴ 나머지 <...したあまり/あげく>; I - 기 때문 - 에 <...するために(理由), ...するので>; II - 로 - 에 - 도 / I - 는 - 데 - 도 / II - ㄴ - 데 - 도 불구하고 <...するにもかかわらず>等多数. 一部の形のある部分に副助詞が接尾することがある. このあたりの調査は進んでいない.
- 4) 「体言形相当の分析的な形」: (連体形+) 짓 <...すること>

B) 体言

- 5) 「格助詞相当の分析的な形」: - 에 대하여/대해서 <- について, 対して>, - 에 대한 <- についての, 対する>; - 를 / - 을 위하여/위해서 <- のために>, - 를 / - 을 위한 <- のための>; - 로 / - 으로 말미암아 <- によって>; 裸の形+치고<...として>; 裸の形+삼아 <...として>; - 를 / - 을 가지고 <...をもって, ...をして>, - 를 / - 을 두고 <...について>等多数. 一部の形には副助詞が接尾し得る.
- 6) 「並立助詞相当の分析的な形」: - 는 / - 은 물론 <- は勿論>, - 는 / - 은 고사하고 <- はさておき, ...どころか>, 裸のかたち+뿐 - 이 아니라 <- だけでなく>等. これらの形は「A·B」という構造の仲で A と B の間に入ると B の次に必ず「も」が接尾するという点で「A も

Bも」とよく似ている。この場合の「も」の認定について（果たしてそれを「並立助詞」と呼んでよいのか？）問題が生ずる。-는 / -은 -
-키녕<...どころか>もまた実はここに属するもの（分析的な形）ではないのか？

いまのところ「副助詞相当の分析的な形」が見つかっていない。

ところで「分析的な形」は単語のレベルにもあると思われる。ドイツ語の「分離動詞」は接頭辞と語幹が一定の条件のもとに分離し、接頭辞があたかも副詞のように見えるものだが（歴史的には副詞が接頭辞化したものである）、英語のいわゆる熟語動詞（あるいは動詞句）はいつも分離しっぱなしの動詞と考えたらよく、これはまさに「動詞相当の分析的な形」である（get out, go on等）。このように「単語結合」とは区別される名詞相当、形容詞相当、副詞相当の分析的な形があるかも知れない。God damn等は間投詞というよりは「間投詞相当の分析的な形」と言うべきだろう。ところで「接続詞相当の分析的な形」、「前置詞相当の分析的な形」がある（as soon as等；in front of等）。前者は日本語や朝鮮語の「接続形相当の分析的な形」に、後者は「格助詞相当の分析的な形」にあたるだろう。「動詞相当の分析的な形」の存在するはずのないロシア語も「接続詞相当の分析的な形」、「前置詞相当の分析的な形」はかなり存在する。

朝鮮語には膨大な「하디省略形」の体系があり、これを形態論でどのように扱うかはなおも残された課題である。多分これは「総合的な形」と「分析的な形」の中間に位置するだろう。

10. 「分析的な形」が一見統辞論に属するようにみえて（だからこそその研究がないがろにされてきたのだが）形態論で扱う必要があることを強調したい。ただし「分析的な形」は、明らかに統辞論に属しながらも形態論と密接な関係を持っている「単語結合」とは別のレベルのものである。しかし「分析的な形」も「単語結合」も、そして助詞も繫辞も「総合的な形」の接尾辞、語尾もそれらの意味、機能を扱う時には多かれ少なかれ統辞論、特に「文の成分」を考慮せざるを得ないのである。しかしながら日本語においても朝鮮語においても「文の成分」に関する研究が、これらの言語における句読法の諸問題とあいまって、極めて立ち遅れている（殊に句読法はすべて編集者まかせであって言語学者によってまともに論ぜられたことがない）。「分析的な形」については菅野裕臣、「朝鮮語の分析的な形について」、『アルタイ語研究 I』、東京：大東文化大学、2006、109-124 ページ参照。

[記]本稿は2004年7月東北大学での講演に加筆訂正を施したものである。